

嘘から始まる溺愛ライフ

第一章 迎え梅雨

幼いころ夢見ていた未来はいつたい何だったんだろうか。

瀬尾実羽は空に溶けていく白い煙をぼんやりと見つめながら考えた。

あの煙は祖母のものだ。

祖母は先日、誤嚥性肺炎が原因で亡くなった。もう九十歳近かったので寿命だろう。

今、実羽は火葬場に一人、立ちつくしている。

母方の祖母に会ったのは、実羽が五歳の時。祖父が他界した、その通夜の席だった。母は駆け落ちで父と一緒にになり、それまで実家に一度も戻らずにいたからだ。

祖母には兄弟がおらず、母の他に子どももない。祖父の親戚とも付き合いがなかった。そのため祖母を心配した母は、祖父の死を機に父と実羽と共に実家に戻ることを決めたのだ。父との結婚を反対していたのは祖父なので祖母は歓迎してくれ、以来、祖母と一緒に暮らしていた。その母も、三年前に父と一緒に交通事故で他界してしまった。

二十七歳にもなつてと思うが、一人きりになつてしまった不安に、そっと目を伏せる。子どものころのことを思い出そうとしてしまうのは、寂しいからかもしれない。

しばらくそうしていた後、もう帰ろうかと、気持ちを切り替えて顔を上げた。祖母の遺影と遺骨を持ってタクシーに乗り自宅の一軒家に戻る。すると、家の前に一人の男性が立っていた。仕立てのいいスーツを着込んだ神経質そうな男性だ。

「あの……」

声をかけると、その男性が振り返った。

「瀬尾実羽様でしょうか？」

名前を呼ばれるが、実羽は彼に見覚えがない。思わず眉をひそめ、不審な目を向けた。

「……どちら様ですか？」

「失礼いたしました。私、宮島家の当主、宮島錬太郎の秘書をしております松崎という者です。今日は錬太郎より実羽様にお願いを申しつけて参りました」

「宮島錬太郎？」

松崎と名乗る男が出した名前に覚えはない。

実羽が訝しげな顔で見ると、彼は懐から一枚の写真を取り出した。

「これは？」

「あなたのお父上はまだ宮島家にいたところのご家族の写真です。ご覧になってください」

言われるままに少し色褪せた写真を見つめる。実羽はそこに写る人々の顔を順番に辿った。確かにそこには若いころの父らしき人が写っている。

中央には一家の当主であろう人物が、その隣には父によく似た男性がいた。

「錬太郎は、あなたのお父上の兄になります」

「え？」

突然のことに、実羽は驚きを隠せず目を瞬かせた。

何せ、今まで連絡したことのない伯父からの接触だ。いったい、何の用だというのか。駆け落ちした父を捜しにきたのだとしたら、三年遅かった。

「立ち話も何でするので、どこか場所を移しませんか？」

松崎にそう言われ、実羽は迷ったものの大人しくその後についていくことにした。

「少し待っててください」

実羽は自宅に骨壺などを置いて、喪服から普段着に着替えた。

自分がまだ天涯孤独ではなかったことを喜ぶべきだと思う。

けれど、何があっても連絡を取るなど言うくらい両親が父の実家を嫌っていたのを思うといやな予感がした。そもそも父が捨てた家だ。今さら、実羽の存在を歓迎するとは思えなかった。

松崎と一緒に駅前の喫茶店に入る。

適度に混んでいて騒がしく、今の実羽の気分にはうってつけかもしれない。

「何を飲みますか？」

「カフェラテを一つ」

店員に注文を済ませた松崎が、例の写真をもう一度実羽の目の前に置いた。

「あなたのお父上が宮島家の次男だということは、信じていただけますでしょうか？」
「はあ……」

確かに、写っているのは若いころの父のようだし、家族写真に違いがないように思える。ただ気になったのは、中央に座っている人物だ。この一家の当主らしいその人を、実羽はどこかで見たことがあるような気がした。

「どうしましたか」

「いえ、……あの、この中央に座っているのは？」

「宮島家先代当主の幸太郎です。幸太郎はあなたの祖父にあたる方です」

実羽は写真を手にとって、じつと見つめる。

そして、この人物をどこで見たのかを思い出した。

三年前、両親が亡くなった数日後に家を訪ねてきた人物だ。

二階にある自室で泣いていた実羽は一瞬見ただけで会話もしなかったのだが、彼は祖母と一階のリビングで話し込んでいたのを覚えている。

あの時は誰なのか不思議に思ったけれど、写真の人物とあの時の男性が同一人物ならば合点がいく。

祖父は父が亡くなったのを何らかの方法で知って、訪ねてきたのだろう。

もしかしたら連絡を取り合っていなかっただけで、実羽たちが祖母の家で暮らしていることをもつと前から知っていたのかもしれない。

実羽は写真をテーブルの上に置いて、松崎の顔を真っ直ぐ見据える。

「名刺、いただけますか？」

「これは失礼しました。改めまして松崎です」

「頂戴いたします」

受け取った名刺を見て、実羽は思わず眉間に皺を寄せてしまった。慌ててぐりぐりと皺を伸ばす。名刺には実羽でも知っている有名な一流企業の名前が書かれていた。

「宮島コーポレーション……」

先ほどから何度も宮島と耳にしていたけれど、まさか一流企業の宮島コーポレーションだったとは考えもしなかった。

実羽の呟きを聞いた松崎が説明する。

「鍊太郎は宮島財閥の当主になります」

そう淡々と説明されても、俄かには信じがたい。

父は穏やかで争いごとを好まない人だった。絵を描くのが好きで、母と出会った時に描いた“夜空の花”という作品が賞を取ったのを機に画家になったそうだ。もつとも、画家になるきっかけを作った母との結婚を反対されたことが駆け落ちの原因らしいが……

そんな父が大財閥の人間だなんて思えなかった。

しかし、松崎が嘘を言っているようにも見えない。

「幸太郎が数日前に亡くなったので、当主を鍊太郎が継いだ形です」

「そう、ですか」

祖父が亡くなったと聞いても、何の感情も湧かなかった。実羽には関係ないことだ。

松崎の話は一向に要領を得ず、実羽は少し苛立った。

「それで？　いったい私に何の用なのです？　遺産の話ですか？」

祖父の遺産を放棄しろという話なら、松崎がわざわざ実羽のもとに来たのも理解できる。

「いえ、そうではございません。鍊太郎があなたに会いたいと言っているのです」

「それなら、ご本人が会いにくるべきなんじゃないんですか？」

「あいにく鍊太郎は多忙のため自宅を離れることが難しいので、私が代理であなたをお迎えにあげました」

言いたいことはわかるが、実羽の予定を軽んじられているようで気分が悪い。

吐き出そうになる毒を必死に我慢し、ギリツと齒を食いしばった。

「そう、ですか……」

実羽がやつとのことで、それだけを口にする、松崎は伝票に手を伸ばした。

「それでは行きましょうか」

「はい？」

彼は立ち上がり、さっさとレジに向かう。実羽は慌てて追いかけて、自分の分のお金を松崎に差し出した。実羽の小さなプライドだ。

「奢っていたただかなくて結構です」

「……わかりました」

受け取らないと言われるかと思っていたのだが、松崎はすんなりとお金を受け取る。

「近くに車を停めてありますので」

そして、彼は駅近辺の駐車場に向かつて歩き出した。

どこに行くとも告げない彼の背中を実羽は追う。

一瞬、名刺を貰ったとはいえ知らない人間の車に乗ってもいいものかためらったが、それ以上に伯父の用件というのが気になる。

松崎がどこかに電話しているのを横目で見てから、実羽は下を向き小さくため息をつく。

なぜこんなに憂鬱な気分なんだろう。

ただ伯父が自分を心配して会いたいと思っただけ、という可能性もあるのに。

「どうぞ」

顔を上げると、松崎が黒い車の後部座席のドアを開けていた。

実羽は心の中で「大丈夫」と自分に言い聞かせ、強く手を握りしめながら車に乗り込んだ。

車で一時間ほど移動し、着いた場所は高級住宅街の大きな屋敷の前だった。

「鍊太郎の自宅です」

口をぽかんと開けた実羽に松崎が説明する。

こんな大邸宅に自分の伯父が住んでいるのかと改めて驚いた。

大きな門をくぐり、広大な庭園を横目に砂利道を歩く。

松崎の後について屋敷に入り、書齋に通された。

「実羽様をお連れしました」

部屋中央には、父に似た男性と派手な化粧をした女性がいる。

「ああ。……座りなさい」

見た目だけではなく声も父に似た男性が実羽に椅子を勧めた。

「失礼いたします」

目の前の二人の冷たい眼差しを見て、実羽はわかっていながら落胆した。そして、自分が心のどこかで期待していたことに気づく。肉親として少しでも歓迎してもらえないかと思っていたのだ。

自分に呆れてしまう。

二人の態度からは、会わなくて済むのなら会いたくなかったという気持ちがありありとわかる。

「いやだわ。従姉っただけあって、似てる」

「本当だな。これなら、何とかなるだろう」

女性は実羽を一瞥して目を背け、男性はどこか満足そうに頷いた。二人は実羽を無視して話を
する。

実羽の眉間に皺が寄った。

しばらくして、やっと伯父がこちらに視線を向ける。

「お前に頼みたいことがある」

「……どこのどなたか知らない人に頼みごとをされても引き受けられません。まず挨拶からじゃないんですか？」

挨拶も自己紹介もなく本題に入ろうとする態度に、実羽は腹が立った。

そんな頼み方で人が従うと思っているのだろうか。

「まあ、旦那様に何て口の利き方をするんでしょうか」

「……お前の父親の兄、鍊太郎だ。先日父が亡くなったため、宮島家当主になった。これは私の家内だ」

家内だと言われた女性は、ふんつと顔を横に背ける。お前に名乗る名などない」といったところだろう。

「そうですか。私は瀬尾実羽です」

苗字を強調して言う。自分は宮島家とは関係のない瀬尾の家の者だと伝えたいからだ。

そして、胸を張り手にぐっと力を込めながら、実羽は伯父を見据えた。

「それで、今まで会ったことのない伯父が、私に何の用なんですか？」

全く面識のない姪に何かを頼もうとする精神は凄いものだ。実羽には真似できない。

実羽が呆れ顔になっているのに気づいているのかいないのか、伯父は足を組みながら口を開いた。

「我が社の大口の取引先であり、父が懇意にしていた大倉財閥の孫と生活してもらいたい」

「はあ!?!」

住み込みの家政婦を探しているのだろうか。だとしても意味がわからない。わざわざ実羽に頼む必要などないはずだ。

伯父の言っていることを理解できないでいると、伯母が横から口を挟んだ。

「簡単なことよ。うちの娘に代わって数ヶ月、ある男性と生活してほしいってだけだから」
案の定何を言っているのか理解ができない。実羽はますます、不愉快になっていく。

「もちろんタダとは言わない。君は一人だろう？ こちらのほうで金銭面の援助をしよう」

「お二人が仰おんじっていることが全く理解できませんし、したくありません。私は働いてますので一人で生きていきますから」

実羽に経済的な問題はない。

両親の事故死による慰謝料と保険金があるし、祖母が一軒家を残してくれている。

さらに今いま際の際の祖母から、実羽名義の通帳と印鑑を渡されていた。そこには三年前から少しづつ入金された三百万円以上の貯金がある。

もしかしたら、先日亡くなったという宮島家の祖父が実羽に残してくれたものなのかもしれない。というのも、入金が始まったのが両親の亡くなった一ヶ月後だったからだ。そうでなければどうやって祖母が三百万円もの金銭を捻出ねんしゅつできたのかわからない。

「そもそも、何で私わたしがその男の人と生活しなければならぬんですか？」

「文句を言うなんて生意気な子ね。まあ、あの女の娘ですもんね」

「人の母のことを、あの女おんななんて呼ぶのはやめてください。失礼すぎます」

「あら、本当のことよ」

伯母の言い草に、実羽はわなわなと身体を震わせた。

今すぐにもこの部屋にあるものを全てを壊して殴りかかりたい。

「こら、よさないか」

このままでは実行してしまいそうなので、帰ろうと実羽が立ち上がった時、伯父が割って入った。

「生意気な態度を取るほうが悪いんですよ」

「いい加減にしなさい。話が進まなくなる」

伯父の一言で、伯母は不機嫌そうながらも黙る。実羽としては、もう口を開かないでほしかった。そうでなければ、何かを投げつけてしまいそうだ。

冷たい目で伯母を見ていると、伯父がため息をついてソファに座り直す。

「……、政略結婚というほどのものではないが、娘の美麗……君の従妹には婚約者がおつてな。結婚前に試しに同居を——ということになったのだが、まあ、お転婆おんぱでね」

お転婆おんぱという言葉で濁にごしているようだけれど、どうやら美麗という名の従妹は結婚がいやで逃げ出したらしい。その、従妹の代わりを実羽に頼みたいのだろうか。

「従妹に代わって嫁よめげということですか？ こちらの家と関係のない私が嫁に行っても意味がないと思いますけど」

「いいや、実際に嫁よめぐのは美麗だ」

「……私に何をさせたいのかわかりません。まだ、従妹の代わりに嫁げって言われるほうが理解できる」

「あなたのような一般人が、財閥に嫁げるわけありません」

「またしても伯母が話の腰を折る。実羽は頭が痛くなって、こめかみを押さえた。」

「社長。私のほうから説明しても？」

「そうだな。松崎頼む」

さすがに埒が明かれないと思ったのか、すぐ傍で静観していた松崎がスッと実羽の目の前に立つ。そして、伯父に代わって説明を始めた。

「どうやら、祖父同士の約束で大倉家の者との結婚が決まったが、結婚の直前、美麗がどこかに消えたようだ。」

この話には会社の利益が絡んでおり、反故にするわけにはいかない。そこで、美麗を捜す間、代わりに実羽を大倉の孫と同居させようということだ。

「別に同居……と言うか、同棲する必要があるように思えないけど……」

「それが、大倉家のご当主が今すぐにでもお二人と一緒に暮らさせたいと熱望しているのです」

「なぜ？」

「有体に言えば、早くひ孫が欲しいからだそうですよ」

何て理由だと、実羽は叫びそうになった。

確かに、さっさと同棲させて二人の距離を近づけてしまえば手っ取り早い。けれど、当人の気持

ちや都合を無視した乱暴なやり方でもある。

「病気で療養してると言えばいいのでは？」

「それも考えたのですが、見舞いに来ると言われそうです。一ヶ月程度なら誤魔化すことも可能です。それ以上延びると不審がられますので却下されました」

松崎は、淡々と言葉を紡いでいく。

「いやいや、他に何か手があるでしょうよ。私を身代わりにするなんていう無茶で無謀なことしなかつた」

彼らの身勝手さに口調がだんだん荒くなっていく。

「いろいろな案が出ましたが、結局、数ヶ月美麗様の捜索をしている間だけ、入れ替わってもらおうというので落ち着きました」

何でそんなことがうまくいくと思えるのか、実羽には理解できなかった。そもそも、従妹が数ヶ月で見つかるという保証や根拠がどこにあるのだろう。

わざとらしく盛大にため息をつきながら、投げやりな口調で尋ねる。

「私と美麗さんは似てますか？」

「こちらが美麗様のお写真です」

松崎が手帳から写真を取り出して実羽に差し出した。

渡された写真を眺めてみるが、どう見ても似ていない。決定的に雰囲気が違う。

写真に映し出されている従妹は伯母同様とても煌びやかで美しい。それに比べて、実羽は地味だ。

訝しげな視線を松崎に向けると、彼はもう一枚写真を出した。

「そしてこちらが、以前ご友人の結婚式の二次会に出席されたあなたのものです」

それは一年ほど前の写真だった。

花嫁に「顔盛ってきて！」と乞われて、普段よりも派手な化粧で参加した時のものだ。

その派手な化粧時の実羽は確かに美麗にとてもよく似ている。

「化粧をしているあなたは美麗様と似ています。先方は美麗様と直接会話をしたことがありませんし、入れ替わりも可能かと。もちろん、美麗様が戻ってきた時のためにいろいろしていただくこともあります」

「と言うか、美麗さんが本当に戻ってくるという確証はあるんですか？」

実羽がもつともなことを尋ねると、突然伯父が口を挟んだ。

「あの子は三ヶ月ともたん」

「はい？」

すかさず、松崎が補足する。

「美麗様は以前にも、何度か家出をしていらっしやいます。けれど、三ヶ月もつたためしがありません。それに、現金を持ち歩く習慣がありませんので、見つけるのは容易いかと。クレジットカードを使えばすぐに居場所はわかりますから。ですから、実羽様には、最長三ヶ月、大倉様のお孫さんを誤魔化してほしいのです」

どうやら伯父たちは、三ヶ月程度であれば、どうか相手方にバレずに入れ替わりが可能だろう

と考えているようだ。

ようやく言いたいことはわかってきたが、その大倉財閥の男性はそんなに騙されやすい人間なのだろうか。

「どう考えたって、そこまでして入れ替わる必要を感じませんが……。それにもしバレたらどうするんですか？」

「それはお前が考えることではない。美麗の代わりに三ヶ月同棲して、帰ってくる。お前がやることはそれだけだ」

伯父は不遜に言い放った。その態度も、繰り返し呼ばれる「お前」にも腹が立つてくる。

「お断りします」

実羽は毅然と答える。

見た目はどうにか似せることができるかもしれないし、美麗の性格を教えてもらい同じように振る舞うことも可能かもしれない。そうして、相手とできるだけ接点を持たなければ、どうにかできる見込みはあると思う。

ただ、実羽にそこまでする義理はないし、したくない。

もう用はないと再び腰を上げかけた時、伯母が甘ったるい声で伯父に話しかけた。

「あなた、やっぱりアレを出したらどうかしら？」

「ああ、アレか……。松崎」

「かしこまりました」

伯父の言葉に頷いて、すぐに松崎がどこかへ行く。

「アレ」とはいつたい何なのかわからないけれど、実羽はとりあえずもう一度腰を落ち着けた。
「あなた、確か中小企業にお勤めなのよね。お仕事はどうかしら、大変？」

「……ご心配なく、順調です」

とってつけたような世間話に、実羽は苛立ちを募らせる。

先ほど見せられた実羽の写真から考えると、自分のことは調べつくされているのだろう。会社や交友関係を手を出されるのではないかと、警戒心が湧く。

視線を合わせたくなくて、顔を下に向けていると、伯母の香水が強におってきた。

正直、鼻をつまみたい。伯父はよく平気だなと思う。

我慢が限界に近づいたころ、ようやく松崎が戻ってきた。布に包まれた四角い何かを持っている。「お待たせいたしました」

「見せてやれ」

伯父に促され、松崎はテーブルの上にそれを置いて布をゆつくりと外す。

そこに現れたのは、真っ黒な背景の中で花を持った女性がやわらかく笑っている絵だった。

「これって……」

「夜空の花」と言えばわかるか？」

伯父が薄ら笑いを浮かべて答えた。

「……っ」

実羽は息を詰まらせた。

何を見せられても動じるつもりはなかったが、その絵が何なのかわかり、言葉が出てこなくなる。絵に触れようとして伸ばした指先が震えている。ギュッと一度力を入れて拳を握りしめた。そうして、ゆつくりと絵をなぞる。

これは父が画家になるきっかけになった作品で、描かれているのは母だ。思い入れのあるものだったが、駆け落ちの際に荷物になるからと置いてきたと聞いていた。

この絵の話をする父はどこか寂しそうだったのを覚えている。それほど心残りだったのだろう。まさか実物を見られるとは思っていなかった。嬉しさのあまり、涙が零れそうになる。

実羽は鼻を吸りゆつくりと呼吸しながら考えた。

この話に実羽にとつてのメリットはない。その相手の男がどんな人間なのかもわからないし、バレた時、自分まで立場が悪くなる可能性は高い。

絶対に断ろうと思っていたのに、絵を見た瞬間に揺らいだ。

「この絵を私に渡す条件を教えてください」

「美麗のフリをして大倉の孫との同棲をやり遂げることだ。詳しいことは松崎に聞け」

それだけ言い、伯父は伯母をつれて部屋を出ていった。

実羽は目の前の絵をじっと見つめる。今すぐ帰りたい衝動に駆られた。

けれど、松崎が再び布で包んでしまう。

「少々お待ちになってください」

絵を抱えて出ていくのを、実羽はただ黙って見送る。そして深いため息をつき、膝ひざに肘ひじをつけて顔を覆おほった。

自分の決断が間違っていないかどうか不安になる。それでも父の絵のためなら頑張れる気がしたし、頑張りたい。相手の男は一応財閥当主の孫だ。そこまで変な人間ではないだろう。

しばらくすると松崎が戻ってきて、来た時よりも小さな黒い車に実羽を案内した。

「運転しながら、改めて説明させていただきます。また、詳しいことは書面にありますので、そちらもご確認ください」

後部座席の隣に目をやると封筒が置いてある。松崎はそれのことを言っているらしい。

「現在、我々は美麗お嬢様の行方を捜しております。見つかり次第契約は終了となりますが、三ヶ月以内には終わると思っただいて大丈夫です。結婚式の予定を三ヶ月後に入れておりますし、美麗様の誕生日が三ヶ月後なのでちょうどよかったのです」

「結婚するのはあくまで美麗さんってことなんですね」

「はい」

聞かなければいけないことはたくさんあるはずなのに、何だか気力が出てこない。

ぼつりと音が聞こえて窓の外に視線を向けると、雨粒が窓ガラスに当たっていた。

第二章 五月雨さみだれ

一週間後、実羽は自宅でこれから始まる同棲のための荷作りをしていた。

荷作りといっても、段ボール二つと大きな鞆かばん一つだ。生活してみても足りないものが出たら、取り戻れば良いと思っっている。

たった三ヶ月弱、たいした準備はいらないだろう。それに、財閥のお嬢様の美麗が好みそうなものはあまり持っていないかった。

その後、美麗の写真を改めて松崎に見せてもらった。美麗は清楚せいせいなお嬢様というよりは濃艶のうえんなセレブといった感じの人だ。男性経験がほとんどない実羽には出せない色気がある。

彼女に似せるために、実羽は松崎に頼んで美麗の行きつけの美容院で彼女と同じ髪型にしてもらった。色も真っ黒からブルージュカラーに染める。

お洒落しやれにそれほど興味がない実羽は、この初めてブルージュカラーというのを知った。

約一週間かけて美麗に似せるための化粧の練習をし、松崎から手渡されたDVDを何回も見て、美麗の立ち居振る舞いを覚えた。

もっとも、なぜか松崎は実羽が美麗を真似るのに非協力的だ。美麗が映っているDVDは実羽が何度も頼んでやっと持ってきたくらいだし、美麗の人となりを探ねてもはぐらかされる。

不思議に思い、実羽が美麗ではないとバレてもいいのかと、松崎に聞いてみると「あなたが三ヶ月間、美麗様を演じ切れるとは思えないので。適度でいいですよ」とシレッと答えられた。

やはり、松崎もこの計画には無理があることに気がついているようだ。もしかしたら、当座を誤魔化すことができれば、実羽よりも美麗のほうが魅力的なので、騙されていたとわかつてても美麗を選ぶと思っているのかもしれない。

だとしたら、これから頑張ろうと思っている実羽に対して失礼な話だ。

松崎のそんな態度にもややしなながらも、実羽は美麗になるための努力を続けた。

美麗を知れば知るほど、自分とは相容れない価値観、感性、趣味嗜好しゅごをしていることに気づく。

従妹いとことはいえ、育った環境がまるで違うのだ。好きになるものも、考え方も異なるのは当然だろう。

全ての準備を終えた引越し当日。その日は土曜日だった。

働いていない美麗本人ならともかく、会社勤めの実羽は土日しか引越し作業ができない。

実羽は色のついたアイシャドウを使い、アイラインを濃く引いた。濃いめのチークに発色のいい口紅をつけ、普段より露出度の高い服を着て美麗そっくりとなる。

心臓がばくばくと鳴っているのが自分でもわかって、落ち着けと何度も言い聞かせた。

これから一生に一度の盛大な嘘をつく数ヶ月間が始まる。

目を瞑つぶって息を整えていると、両親の遺影えいげいが目に入った。実羽は二人に笑みを作ってみせ、玄関に向かう。

小さな鞆かばんを持って家を出ると、外は雨が降り出す寸前だった。曇天どんてんの下、松崎が車を停めて待っている。

「荷物はそれだけですか？」

「はい、これだけです」

「そうですか」

引越し業者は頼んでいないため、松崎が荷物を運んでくれることになっていた。

彼は実羽の荷物の少なさを見て、眉間に皺しわを寄せる。

美麗ならもつと多くのものを持ち込むのに、と思っているのかもしれない。

けれど、ただか三ヶ月弱のために何か揃そろえる気が実羽にはなかった。何か大倉の孫に聞かれたら、買ってその場を誤魔化せばいい話だ。

結局、松崎は何も言わず荷物を車に載せてくれた。実羽は彼に促うながされ車に乗り込む。

一時間以上走り、高層マンションの前で停まった。

車を降りると両手足が微かかに震えている。ぎゅっと手を握りしめ一度目を強く瞑つぶって開く。する

と突然、実羽の目の前に小さな紙袋が現れた。

「何!? 手品!？」

「そんなことあるわけがありません。あなたが周りを見ていないだけですよ」

松崎が呆あれた視線をこちらに向けながら、紙袋を手渡してくる。

「これはある方から、あなたに渡すように頼まれたものです」

「ある方？」

「詳しくは言えません。あなたに一つだけアドバイスをおきますが、人を騙すコツは必ず一つ真実を混ぜることで。それだけで信憑性が増しますからね」

「はあ……、何だかいろいろとありがたいございます？」

松崎が無表情のままするアドバイスは、どことなくズレている。それでも、彼なりの厚意なので実羽は思うことにした。

紙袋を受け取り、松崎の後についてマンションのエントランスへ向かう。

エントランスに入ると、そこはホテルと間違えてしまいそうなほど豪華な内装になっていた。フロントにはコンシェルジュが穏やかな笑みを浮かべて立っている。

松崎がフロントに近づくと、出入り口付近のソファに座っていた二人の男性が立ち上がり、実羽たちのほうへ歩いてきた。

「お前が宮島美麗？」

前を歩いていった男性が、無愛想に聞く。

「……あ、はい！　そうですが、あなたはどなた？」

呼ばれたことのない名前だったせいで、目が合っているというのに実羽は反応が遅れた。自分のことだと気がつき慌ててしまい、声が裏返った。

隣にいる松崎が呆れたような目でこちらを見てくるので、余計に焦る。

幸い、目の前の男性は特に不審に思わなかったようで、無表情のままだ。

気持ちを落ち着かせその姿をまじまじと見て、実羽は息が止まるほどの衝撃を受けた。

モデルのようにスラリとした長身に高い鼻梁。そして薄い唇。長い睫に縁取られた目は、青黒い海のように、綺麗だがどこか寂しげだ。

十人いれば十人が、彼を美男子だと断言するに違いない。それほど彼は綺麗な顔をしていた。

彼が着ている仕立てのいいスーツを見て、この男性が自分これから一緒に暮らす人なのだと実羽にはわかった。

「……口が開いてるぞ」

「え、あ、すみません」

不躰にじつと見てしまったことに気がつき小さく謝ると、男性は怪訝な顔になった。

いったい何だというのだ。もしかして、メイクが剥けているのだろうか。雨の日は化粧が崩れやすい。美麗に扮装するための濃化粧が落ちてしまったのかと不安になる。

「俺が大倉晴樹だ。こっちは、第二秘書の春日井。ボディガードを兼ねてる。口と態度は悪いが、気にしないでくれ」

晴樹が隣に立つ男性を指差して紹介する。春日井は笑みを浮かべて頭を下げた。

「春日井です。よろしく。えーっと、引越し業者を呼んでないっていうから、荷物持ちというか手伝いで来たんだけど……」

春日井は辺りを見渡す。

「ああ、荷物なら車の中に」

松崎が、荷物の場所を答え、そしてそのまま春日井と二人で荷物を取りにいつてしまった。

晴樹は不機嫌そうな顔で黙り込んでいる。

自分を歓迎していなさそうな男と二人きりになるのは居心地が悪い。実羽は密かにため息をついた。

もしかしたら晴樹のほうは美麗との結婚に乗り気なかも思っていたが、そんなことはなかったようだ。実羽としてはあまり積極的に仲よくされても困るのでちょうどいいけれど、けっして気分はよくない。

そっと顔を上げると、晴樹が首をくいつと動かして、実羽に命令した。

「来い」

「……はあ」

傲慢な晴樹の態度に、眉間に皺しが寄りそうになる。彼にとっても不本意な婚約なのかもしれないが、仮にも婚約者に対して取る態度ではない。

それでも、父の絵のために大人しくしようと思ひ、実羽は言われるまま晴樹についていく。

「頼む」

晴樹が声をかけると、話を通っていたのか、コンシェルジュが実羽にカードキーを渡してくれる。「こちらが専用のカードキーとなります。エレベーターと部屋の鍵となりますので、紛失されないようお気をつけくださいませ」

それを受け取り、晴樹と共にフロントの横にある機械の前に立った。駅の自動改札のようなそれ

に晴樹がカードキーをかざすとバーが開く。

「同じようにやれば通れる」

実羽が通ろうとすると、後ろに影ができた。驚いて振り向くと段ボールを持った春日井が立っている。

「社長。俺を置いていく気ですか？」

「遅いお前が悪い。二人ともさっさと来い」

急いで実羽もカードキーをかざし、春日井と一緒に綺麗に掃除された廊下を通過してエレベーターに向かった。

エレベーターに乗ると晴樹が簡単に説明をしてくれる。

「カードキーは上のところにかざして、降りたい階数……と、いつでも他人の部屋がある階は押せないんだが……二十一階を押せばいい」

「わかったわ。ところで松崎さ……松崎は？」

説明を聞いた後に松崎がいらないことに気づき、実羽は春日井に声をかけた。

「ああ、もう用事はないですし帰ってもらいました。何かありました？」

「いえ、問題ないわ」

美麗なら秘書に敬語を使わないだろう。つい敬語になりそうなのを気をつけながら、実羽は美麗らしい口調で話した。

エレベーターは静かに動き、すぐに二十一階に着く。

フロアにはふわふわな絨毯じゅうたんが敷かれ、ドアは三つある。晴樹は奥の部屋の前まで行った。カードキーでドアを開け、晴樹がさっさと中へ入る。

実羽は春日井に促うながされ、部屋の中へ足を踏み入れた。

ここは、もともと晴樹が一人で暮らしているマンションなのだそう。二人で暮らせる程度の広さは十分にあるため、実家暮らしの美麗が晴樹のマンションにそのまま移るといふ話になったらしい。

だだっ広い玄関には、靴箱の上にぽつんと小さな小皿だけが置かれている。晴樹がカードキーをそこに入れたので、実羽も做まってそこに自分のカードを置いた。

靴を脱いで、用意されていた内履きに履き替えると、晴樹が簡単な説明をしてくれる。

「こつちが風呂場、その隣がトイレ。反対側のこつちが俺の部屋で、その隣をお前のために空けた。後で確認してくれ。春日井、お前はその荷物を中に入れておけ」

「了解」

春日井は段ボール二箱と大きい鞆かばんを軽々と持って、実羽用の部屋に入っていく。

晴樹は奥の部屋に歩いていったので、実羽もそれに続いた。

奥の部屋はリビングだった。ソファや机など必要最低限のものは置いてあるものの、殺風景だ。

ソファの上に鞆かばんを置いて辺りをきよきよと見回していると、晴樹に声をかけられた。

「随分と大人しいんだな」

実羽はドキリとして冷や汗をかく。

気をつけているつもりでいたが、美麗らしくないのかもしれない。

「……最初くらいわね」

美麗らしい言葉でとりつくるって見たものの、何が正解かわからなかった。この殺風景なリビングを見て「つまらない部屋」ぐらい言ったほうがよかったのだろうか。

どうやって美麗らしく振る舞うか悩んでいると、リビングの扉が開き、春日井が顔を出す。

「えーっと、……美麗お嬢さん？ 荷物運んでおい込んで確認お願いします。社長、俺そろそろ戻って平気ですか？」

「ああ、構わない。明日は頼む」

春日井は実羽を何と呼ぶか悩んで、結局「お嬢さん」にしたようだ。

確かにまだ婚約者なので、「奥様」ではない。それに春日井の言動を見るかぎり、「様」づけするタイプではないだろう。

「了解。それじゃあ、失礼します」

「ありがとう。お疲れさま」

帰ろうとする春日井に向かってそう言葉をかけた後、実羽は内心しまったと思った。

美麗が荷物を運んでもらったぐらいで、婚約者の部下にお礼を言うとは思えない。あえて悪い印象を与えて晴樹たちと距離を取るべきだった。

けれど、入れ替わった美麗がその後困る気もして——実羽の頭の中はぐちゃぐちゃになる。

春日井は特に実羽の様子を気にすることなく去っていき、リビングには重い空気が漂ただよった。

普段の実羽なら、この空気をどうにかしようとべらべらとしゃべってしまうのだが、今は美麗なので口を噤む。

重苦しい雰囲気息が詰まる。まだ晴樹と会って十分も経っていないのに、ストレスで胃が痛くなってきた。

晴樹が高級そうな腕時計を確認しながらソファに腰を下ろす。

「まだ六時過ぎか……。食事は七時にするが、構わないか？」

「大丈夫」

「そうか」

七時に夕飯にするのは構わないのだが、何を食るかという相談はないのだろうか。もっとも、問われたところで美麗らしい答えが出せたかはわからないが。

まさか今から作れと言いつ出すのではないかと、実羽は内心イラツとした。

そもそも晴樹は美麗に興味がないようだ。仕方なく話しかけているというのがありありとわかる。

晴樹は窓際に移動し、スマホで誰かに電話をかけた。

「食事を頼む。店は任せるが、七時に届けてくれ。ああ、よろしく」

電話を切ってこちらを向く。実羽はびくりと肩を動かしてしまった。

「聞いての通りだ」

「あ、ありがとう」

そしてまたお互い無言になった。

このまま二人で黙っていてもどうしようもないので、実羽はリビングをぐるりと見て回ることにする。晴樹に文句はないようで、特に何も言ってはこない。

改めて見ても、やはり殺風景な部屋だ。モデルルームをそのまま家具つきで使っている感じで、住人である晴樹の色が見えない。

唯一の特徴はキッチンのおすぐ傍にある棚で、そこには多種多様なお酒が置いてあった。

晴樹はお酒が好きなのだろうか。

実羽は棚に近づいてどんなものがあるのかをみることにした。

お酒はそこそこ嗜むが、詳しくはない。それでも、棚に入っているお酒がどれも高価そうだということだけはわかった。

「気になるものでもあったか？」

「え？ いや……。あなたのお気に入りはどれなの？」

美麗ならば銘柄がわかるのかもしれない。実羽は晴樹に質問することで誤魔化した。

「そうだな。貴い物だが、このコニヤックあたりだな」

晴樹が棚に寄ってきて、琥珀色の瓶を取り出した。高級感が溢れた綺麗な瓶だ。晴樹はそれを実羽に持たせようとしたが、落としたり怖いので見せてもらうだけにする。

「へえ……。そうなの」

「世界限定三百本のものなんだが……」

「さんびやっ……。ごめんなさい。気にしないで」

三百本しかない限定品ならば、その値段は相当なものはずだ。驚きすぎて声が裏返る。そんなものが家の中にあるというだけで怖い。

一般庶民の実羽からすると高価なものに囲まれた生活というのは、ある種恐怖だ。そんな実羽を見て怪訝けげんそうな顔をしながら、晴樹はコニヤックを棚の中にしまう。

実羽は、できるだけこの棚には近づかないようにしようと、心の中で決めた。

モデルルームのような高層マンション、そして高級なお酒。今までの自分の生活からは想像もつかない世界に、頭がくらくらしてくる。

「俺は先にシャワーを浴びて着替える」

晴樹はそう言っ、実羽の様子を気にすることなくリビングを出ていった。

そのどうでもよさそうな態度が、都合がいいはずなのに、とても腹立たしい。

実羽はわなわなと震える肩をぐるりと回してから、ソファに座った。

ふかふかしたソファに、思っていた以上に身体が沈んで「おお」と声が出てしまう。その座り心地を堪能しながらスマホを弄いじっていると、インターホンが鳴った。

晴樹はまだ風呂から上がっていないため、実羽が出ることにする。インターホンの画面にはコンシェルジュが玄関先にいる映像が映っていた。

『お食事をお届けにまいりました』

「今開けるわ」

美麗の口調にできるだけ似せて答える。

玄関の前では、コンシェルジュが先ほど晴樹が頼んだのであろう食事を持って立っていた。

「ありがとう」

お弁当を二つ受け取ると、コンシェルジュは頭を下げたて帰っていく。

渡されたのは、ずっしりとした重さのある黒色の四角い重箱だった。他にも黒色のお椀が四つある。実羽はそれをリビングのテーブルに置いた。

テーブルはどっしりとして艶つやがあり、いかにも高そうだ。傷一つないそのテーブルを見て、実羽は汚してしまわないかと不安になる。

その時、ドアが開く音がして振り返ると、バスロープ姿の晴樹がいた。

「わああ！ ちよつ、何でちゃんと服着てないのよ！」

思わず、実羽は美麗の真似を忘れて叫ぶ。

「はあ？ バスロープ着てるからいいだろ……。何だよ、お前は処女か」

「しよっ……。あ、あなたねえ！ デリカシーっていうものが欠けてるんじゃないの!？」

必死で落ち着きを取り戻し、美麗を装まもう。

バスロープから出た晴樹の腕や足はほどよく筋肉がつき、とても艶あでやかだ。そこから男性の色気が醸かみ出されていた。

実羽として男性経験がないわけではない。けれど、大学生のころに付き合った人との少しだけの経験だ。社会人になってからは会社に慣れるのに必死だったし、両親が亡くなったことがショックで男性と付き合う気になれなかった。

そんな実羽にとって、晴樹の姿は刺激が強すぎた。

実羽は本日何度目かわからないため息をついた。

「はあ……、とりあえずご飯を食べましょう？ お弁当が届いているわ」

「そうだな。俺はビールを飲むが、お前は どうするんだ？ 家には酒とミネラルウォーターしかないけどな」

「じゃあ、私もビールをいただけるかしら」

飲まずにはいられない気分だ。

「なら、冷蔵庫からビールを出してくれ」

言われた通りに冷蔵庫を開き、実羽は口をぽかんと開けた。

冷蔵庫の中に大量の酒とミネラルウォーター以外のものが見当たらない。

酒とミネラルウォーターしかないというのは、飲みものことではなかったようだ。

野菜や肉どころかケチャップなどの調味料もいっさいない。いったい晴樹は、何を食べているのだろうか。

缶ビールを二本手に取りながら、実羽の頭には先ほどのお弁当がよぎった。

食事はデリバリーを頼むか、外で済ませているのかもしれない。それなら料理をしている気配が全くないのに納得ができる。

晴樹はすでにテーブルに着き、食べる準備を始めていた。グラスを出せとは言われなかったので、実羽はビールをそのまま彼の前に置き、向かい合わせになるように座る。

「いただきます」

「……いただきます」

晴樹が声を出したので、実羽もつられる。

正直、今までの態度を見ていて晴樹が「いただきます」などときちんと言うのは意外だった。単に育ちがいいからだけなのだろうが、苛いらついていた心が少し鎮しずまる。

黒いお弁当の蓋ふたを開けると、優しい香りが鼻腔びじょうをくすぐった。

色鮮やかに並べられたニンジンとフキノトウの煮物、匂のきすの天ぷらが目に入り食欲を刺激する。

「おいしそう……」

重箱とは別のお椀には、ご飯と吸い物が入っていた。どちらもまだ温かい。

実羽は一口お吸い物を飲んで、その味に舌鼓したつづみを打った。

自分が今まで食べてきたものも十分おいしいと思っっているが、これは別格だ。

どう考えても普通のお弁当ではないと動揺しながら、箸袋に視線を落とす。そこに書かれていた店名は、政治家がよく使うとニュースで取り上げられていた有名な割烹料理店かっぽうだった。

それを晴樹は、当たり前のような顔をして缶ビールを飲みながら食べている。

実羽は、あまりにも世界が違いくさると思った。

たった三ヶ月とはいえ、うまくやっていけるのだろうか。彼と仲よくなる必要がないとしても、生活習慣があいそうにない。

ため息が出てくるのをグッと我慢して、実羽はビールを啜る。

ちらりと視線を向けると、晴樹はもくもくとお弁当を口に運んでいた。

こんなにおいしい料理だというのに、喜んでいるようには見えない。

食べ慣れてしまうと、この料理のおいしさに感動しなくなってしまうのか。だとしたら、何て寂しいことなんだろう。

食事を終えると、晴樹は大きなソファに座り、無言でテレビをつけた。

「ねえ、このお弁当食べ終わったらどうすればいいのかしら？」

「玄関前に置いておけば片づけておいてくれる」

普通のデリバリーと一緒にということか。

実羽も食べ終わったので、二人分の重箱とお椀をキッチンに持っていき、さっと洗う。さすがに洗剤とスポンジはある。

そして風呂にでも入ろうとリビングを出た。

この家に来た時に、大方の部屋の場所は教えてもらったが、実際には見ていない。晴樹の部屋以外の扉を順番に開けてみる。

リビングの逆の奥は洗面所で、実羽の家の洗面所が優に二つは入ってしまうほどの広さだった。

きつと風呂場も広いだろう。

楽しみにしつつ、少し戻って自分の部屋のドアを開ける。

真つ暗な部屋の中には、段ボールが二箱と大きな鞆かぼんがぼつんと置いてあるだけだった。

「え？」

電気をつけて確認するが、他には何もない。

ベッドも棚も机も、家具は何一つ置いてなかった。慌ててクローゼットの中を見てみたが、ハンガーすらかかかっていない。

「……ええー？ いったいどうしろっていうのよ。最低限の家具ぐらい用意しておいてくれたってよくないかな」

肩を落として頭を抱えた後、下着と寝巻きを準備し、晴樹に布団がどこにあるのか聞こうとリビングに戻った。

すると、ソファの陰から煙が舞っている。どうやら晴樹は喫煙者のようだ。

「ねえ」

「何だ？」

後ろから声をかけると、晴樹は煙草を消してこちらへ振り返る。その姿は気だるげでかつこい。

「私の布団、どこにあるの？」

「お前の布団などないが」

晴樹は何を質問されているのかわからないといった、きょとんとした顔で答えた。

「……じゃあ、私今日どこで寝ればいいのかしら？」

実羽は思わず怒鳴りそうになったのを息を止めてこらえ、何とか平静な声で聞く。

「あー、そういうえば、ベッドを持ってこなかったんだな。明日自分で好きなものを買いにいけばいい

い。今日のところは、ソファで寝てくれ」

「はあ？ ならあなたはどこで寝るの？」

「自分の部屋だ」

実羽の身体が怒りでわなわなと震えた。

「へ、へえ……！ 今日から私に来るってわかっていながら、布団すら用意してないのね。お忙しい社長様は、そんなことには思いつかなかったってことかしら」

実羽の皮肉が効いたのか、晴樹の顔が不機嫌そうに歪み、眉間に皺が寄る。

「……、一日ぐらいどうってことないだろう」

「それならあなたがソファで寝れば？ それこそ、一日ぐらいどうってことないわよね」

「あー、わかった！ わかったよ。俺がソファで寝るから、お前は俺の部屋のベッドをしろ」

「使えなんて命令しないで！ 私はあなたの部下じゃない！ 今日はあなたの部屋で寝るから、絶対に入ってこないでよね！ 入ってきたら殴ってやる！」

実羽が一気に言うのと、晴樹はより深く眉間に皺を寄せて顔を背ける。頭をガリガリとかいて、ソファに転がってしまった。

実羽は腹立たしさとで暴れたいのを我慢してリビングを出る。すぐに脱衣所に向かい、無造作に服を脱ぎ捨てた。

「全く、何なのよ！」

苛々としながら、勢いよく風呂場のドアを開ける。

予想通り、風呂場は広く、綺麗だった。ゆったりとした浴槽にはたっぷりと湯が沸いている。

それを見て、感情が昂ぶってささくれだっていた心が一気に落ち着く。

さっそく頭や身体を洗って、湯船につかった。身体をグッと伸ばしながら、息をつく。

「はー、気持ちいい……」

落ち着いてくると、なぜあんなに怒ったのか我ながら不思議になる。

「でも、腹立っただしなあ」

いくら何でも布団ぐらいは用意しておいてほしかった。

ないならなくて、松崎にでも伝えておいてくれればこっちで対処するなり頼むなりできたのに。

無理があると思っていた身代わり同棲生活も、晴樹がこれほど美麗を歓迎してないのであれば何とかなりそうだ。互いに興味を持たない仮面同様なら、婚約者が別人と入れ替わったところで気づかないだろう。

深く息を吐いて、実羽は風呂から上がった。タオルで身体を拭いて寝巻きに着替える。

そこで、はたと気がついた。

着ていた服をどうやって洗えばいいのだろうか。

晴樹が着ていたシャツは脱衣所の籠の中に投げ入れられている。籠に入れておけば雇いのハウスキーパーが綺麗にしてくれるのだそうだが、一緒に洗われるのは何だかいやだ。

洗濯機があるので、自分の服は実羽自身で洗うことにして、晴樹のシャツが入っている籠とは別の籠に入れた。

洗面所に置いてあったドライヤーで髪の毛を乾かしてから、自室に戻った。

椅子も机も何もない部屋で、段ボールの上に鏡を置き、簡単なスキンケアをする。

明日、家具店に行こうと決意して、隣の晴樹の部屋へ行った。

ドアを開ける時に少し躊躇して、手が止まる。

婚約者であったとしても、初対面の男性の部屋に入るといっはいかがなものか。

けれど、あれだけ言い合いをしたのだ。今さらソファで寝たいとは思わないし、悪いのは晴樹のほうだ。

実羽は意地もあって、ドアを開けた。

晴樹の部屋は思っていたより綺麗だった。大きな本棚に経済学の本など、実羽には全くわからなさそうな分厚い本がずらりと並んでいる。

本棚とは逆の壁近くにはキングサイズのベッドが置かれているが、それが部屋を狭く見せることはなかった。

きちんとベッドメイキングがされていて、誰かが寝た形跡は残っていない。

実羽はホッとした。さすがに寝ていた形跡があれば多少抵抗はあっただろう。

大きなベッドにもそもそと入り込んだ瞬間、「お、おお……！」と感嘆の声が口をつく。

今まで実羽が使っていた布団とは全く異なる寝心地だ。

光沢のあるシルクのかげ布団は肌触りが気持ちよく、敷布はふかふかで、温かい真綿に包まれている気分になる。

ふと、バスローブ一枚でソファに寝ている晴樹の姿が頭をよぎった。思わず唸り声が出る。

六月に入ったとはいえまだ微妙な時期。このまま放っておいて、風邪を引かれるのはいやだ。

実羽は起き上がって、もう一枚かけ布団がないか探した。けれど今実羽が使っているものしか見つからない。悩んだ末に、自分の部屋の段ボールから膝かけを取り出し、リビングへ向かった。

音をたてないよう静かにリビングを歩き、ソファに近づくと寝息が聞こえてくる。

どうやら晴樹は、ぐっすりと眠ってしまったようだ。

高級品らしいソファはふかふかして座り心地がよかったので、眠ったとしても身体が痛くなるようなことはないだろう。

実羽は寝ている晴樹に膝かけをかけて、改めてベッドに戻り、眠りについた。

翌日、全身を温かい何かに包まれている感覚に、実羽は目を覚ました。

明らかに布団のやわらかさではない。

今自分を包んでいるものはいったい何なのか、ぼんやりとした頭で考える。

うっすらと目を開けると、肌色が見えた。

「……え？」

一瞬息が止まり、実羽は一気に覚醒する。

実羽に抱きついていたのは晴樹だ。

リビングのソファで寝ていたはずの彼がなぜここにいるのかわからず、混乱する。

「ひあああああつ！」

「ああつ？ 五月蠅い……」

実羽が叫ぶと、晴樹は煩わしそうにかけ布団を頭に被る。

「五月蠅いじゃないわよ！ 変態！」

実羽は、思わず近くにあった枕を両手で掴み晴樹に殴りかかった。

「うつわ！ お前！ 枕でなぐっ……っつ」

慌てて起き上がった晴樹に、運悪く実羽が振り回した枕がクリーンヒットする。彼は呻き声を上げながら倒れ、殴られた場所を擦った。

「いつつ……、お前、思い切りやりすぎ……」

「何言ってるのよ！ 入ってきたら殴るって言ったじゃない！ 枕だけマシだと思え！」

晴樹は起き上がって自分の部屋を見渡し、実羽を見て深いため息をついた。

実羽の心臓は寝起きの衝撃でバクバクと鳴っている。

晴樹はこちらに興味がなさそうだったので大丈夫だと思っていたが、こんなことになるのなら、ドアの前にバリケードを作っておくべきだった。この部屋には内鍵がついてないのだ。

「はあ、とりあえず起きるか。お前、今日は？」

晴樹は実羽の怒りなど意に介さず、淡々と話し出す。

「今日は何なのよ？ 私の話を知っているの？ 腹が立つ」

「お前の今日の予定を聞いてるんだよ。俺は仕事がある。そうだな、あと一時間ほどで出なきゃな

らない。わからないことはコンシェルジュにでも適当に頼め」

実羽の悪態は完璧に無視された。枕を晴樹に向けて投げつけるが、手で防がれる。

「ふん、あなたに言われなくなつて勝手にするわよ。日曜なのに大変ね。社長様はせいぜい頑張つて働くといいわ」

美麗に似せた傲慢な口調にも晴樹は無反応で、マイペースに出かける準備を始める。

「つまらない人ね」

実羽は仕方なく、顔を背けて晴樹の部屋を出た。

朝から喧嘩するつもりはなかったが、眠っているベッドに勝手にもぐり込まれたのは許せない。

実羽が寝ていたのは晴樹のベッドなのだから、もしかしたら寝ぼけて間違えたのかもしれないが、それならそう言つて謝つてほしかった。

ただ不思議なことに、晴樹に触られていたこと自体には嫌悪感がない。

「変なの」

実羽は顔を洗つて頭をしゃっきりさせようと、洗面所に向かった。

鏡で自分の顔を見て「あつ……」と言葉が漏れる。

鏡に映っているのは、美麗のように煌びやかで派手な顔ではなく、化粧が落ちて地味な素の自分だ。

晴樹に素顔を見られてしまった。変に思われなかったか不安になる。

だが、気づかれなかったと自分に言い聞かせ、震える手で化粧を済ませる。

着替えてリビングに行く、すでに出かける準備を終えた晴樹がいた。

「おい」

「何？」

「これを渡しておくから、必要なものは全てそれで支払え。荷物持ち兼運転手に春日井を呼んである。二時間後に来るから、それまでに出かける用意をしておくんだ」

相変わらずの命令口調だが、実羽にはもう反発する気力が残っていないので、素直に手を出す。

「わかった。……って、これ、ブラックカード……？」

初めて見た本物のブラックカードに実羽は動揺した。

このカードがあればほぼ何でも買える。

しかも、支払ってやるという言質を取った。これで何百万円の指輪を買っても咎められない。

もっとも実羽はそういった装飾品にはあまり興味がないし、生活に必要なもの以外買おうとは思っていない。綺麗なものは好きだが、集める趣味はない。

晴樹はそんな実羽の様子をじっと見てから、無言で玄関に向かう。

実羽は受け取ったカードをテーブルに置いて、彼についていった。

靴を履いていた晴樹は、実羽がついてきたことに驚いたようだ。目を見開いて実羽を見る。

そこまで驚くことだろうかと怪訝に思いながら、実羽は晴樹に声をかけた。

「いつてらっしやい」

「……」

何も答えない晴樹に苛立ち、不機嫌な顔で文句を言おうとする。けれど、その前に視線を彷徨させた彼が、そっぽを向いたままぼそと呟いた。

「いつてくる」

そして、そのまま出かけていった。

「何、あの顔」

実羽は驚いて、しばらく玄関に立ちつくす。

晴樹はしかめっ面のくせに、気恥ずかしそうに頬を染めていた。その姿が可愛いと思える。

実羽の中にくすぶっている彼への不満が少し緩和された。

口の端を上げながらリビングに戻り、先ほど渡されたブラックカードを改めて手に取る。

これで好きなものを買えとは、太っ腹と言うべきなのか。もしかしたら、昨夜のベッドのことを彼なりに気にしてくれているのかもしれない。

けれど、正直これは実羽の手に余る。

カードの扱いをどうしようか悩みながら、実羽は言われた通り出かける支度を始めた。

買い物をするなら何が必要なのか確認しなければいけない。

まずは寝具だが、美麗の好みがあることを考えると、ベッドを買う気にはあまりなれない。布団だけ買うことにした。

机も欲しいが、小さな折りたたみ式のものの方が妥当だろう。パソコンが置ければ十分だし、美麗が必要なければ処分しやすい。

それと両親と祖母の位牌いはいばいを置けるものが欲しかった。誰もいない家の仏壇に置いていくのは忍びなく、実羽は三人の位牌と遺影いざなを晴樹のマンションに持ってきたのだ。

クローゼットの高さや奥行きをメジャーで測って手帳に書き込み、次にキッチンに向かった。人が住んでるとは思えない冷蔵庫や調理台回りを全部確認する。

飲みもの以外は本当に何もなかった。食べものどころか調理道具もほとんどない。

あるのは包丁とまな板ぐらいで、調味料は塩と胡椒こしよ、そして醤油しょうゆしかなかった。

晴樹が料理をした形跡がないのもちろんのこと、誰かを雇っている感じもしない。

「無理、絶対無理！」

実羽は思わず一人で叫んだ。

他人の家の台所を使うのは気が引けるものの、毎日外食かデリバリーなど、お財布がもたない。

晴樹に言えば食事代を出してくれるのかもしれないが、何より自分で作ったご飯が食べたかった。

実家から調理器具を持つてくるかどうか実羽は唸りながら悩む。

けれど、そのために松崎に手伝つてなどとは言えなかった。というより、言いたくない。

それにここから出ていく際にわざわざ持つて帰るのも億劫おちがうだ。

そういったことを考えていると、だんだん面倒くさくなってくる。

実羽が新しいものを買おうと決意した時、チャイムが鳴った。インターホンを確認すると、春日井の姿が映っている。

『お迎えにあがりました』

「わかったわ。今から下りる」

実羽はすぐに靴を履き、エントランスに向かった。

エレベーターが一階に着くと、ホテルのように煌びやかなホールが目に入る。さすがに昨日の日では目が慣れない。ソファへ視線をやると、春日井が座って待っていた。

彼は実羽に気づき、立ち上がって頭を下げる。

「今日はお世話になります」

実羽がそう言うと、春日井はじつとこちらを見つめ頷いた。

彼に見つめられてまたやってしまったことに気づく。美麗ならばこんな言い方はしない。

春日井は笑っているが、実羽は何だか観察されているような気分になった。

観察——もしかしたら春日井は晴樹の命令で本当に実羽を観察しているのかもしれない。

晴樹の家が美麗の素行調査をしている可能性はある。というより、してないほうがおかしい。

美麗との違いに気づかれてしまったらと思うと、実羽の背中にうっすらと汗が滲にじんだ。

「どうしたんです？」

「え、あ、いえ。えっと……、行きましようか」

「そうだな……、いえ、ですね。表に車を回してありますんで」

昨日晴樹が言っていた通りどうも春日井は敬語が苦手のような。あまりにもしゃべりにくそうなので不慣ふびんになってくる。

「敬語じゃなくて構わないわよ。しゃべりやすいようになさい」

歩きながら腕を組んで高慢に見える態度を取る。

美麗なら「聞き苦しいから、しゃべるのをやめなさい」ぐらい言いそうだが、さすがにそんなことは言えない。だから、できるだけやわらかさが出ないような言葉で伝えてみた。

高圧的な言動は思った以上に疲れる。

特に昨日から晴樹とのことで、実羽は疲弊ひひしていた。

早くも美麗を演じることに限界を感じ始めていたのだ。

「そう言ってもらえるとありがたい……が、あんた、話しやすいんだな。思っていたより」

「……さあ？ 普通じゃないかしら」

結局、実羽は適当に誤魔化すことになってしまった。これではいつボロが出るかわからない。

二日目にしてこれではどうしたものかため息をつきつつ、春日井が開けてくれたドアから車の後部座席に乗り込んだ。安い家具店に案内してくれと伝える前に、春日井に行き先を言われてしまう。

「百貨店に向かうから」

「あ……、うん。お願い」

百貨店だと値段が高くなるからあまり気乗りしないが、美麗は財閥のご令嬢だ。安い家具など使わないだろう。

昨日から何度も自分の感覚とお金持ちの感覚の違いを思い知らされている。

晴樹から渡されたブラックカードの入った鞆かばんが急に重く感じられた。

車に乗って三十分ほどすると百貨店の前に着く。春日井が車を置いてくると言うので、実羽は先に寝具売り場に向かうことにした。

一番安い布団を出してもらい、店員と話をしながら寝心地を確かめる。

不意に、昨日の晴樹のベッドの寝心地のよさを思い出す。たった一度でも体験すると、身体が覚えてしまうようだ。

どうしようかと悩んでいるところに、春日井が合流した。

「何を悩んでいるんだ？」

「え、あ、っと……」

「決められないなら、一番いいものを出してもらえよ」

「いや、でも」

春日井の言葉を聞いた店員が、上客だと判断したのか「すぐに持ってきます！」と去っていく。数分もすると高級そうな敷布団と枕が用意された。確かめるまでもなく寝心地がよさそうだ。

ついている値札には信じられない桁けたの数字が書かれている。

実羽がためらっているのを見た春日井が、横から口を出す。

「これがよさそうだし、このセットで」

「か、春日井さん」

「カード渡されてるんだろ？ 社長の金なんだ、気にすんな」

そう言いながら春日井は笑う。彼はこのぐらいの値段、見慣れているらしい。

そそくさと店員がレジに金額を打ち込むのを見て、実羽は断る気力を失った。諦めて晴樹から渡されたブラックカードを出し、支払いを済ませる。

一度大きな買い物を支払うと、気持ちが軽くなった。配送を頼んでから台所用品のコーナーに向かう。

自分のものは自分のお金で支払うつもりだが、今日の買い物は晴樹のマンションに住むために必要なものだ。全部、このカードで支払ってしまおう。

キッチン雑貨のコーナーで、おたまやフライ返しといった細々したものを選んでいく。他にもフライパンや鍋なども購入した。

美しいことがちらりと頭をよぎるが、綺麗なネイルをしていた彼女のことだ、どうせ料理などしないに違いない。入れ替わり後、料理をしなくなったことについては「あきた」とでも言ってもらおう。それに方が一、キッチンを使う時に実羽の選んだ調理道具が合わなかったとしても、彼女なら買い直すだろう。

思ったよりも大荷物になった調理道具は春日井が全て持ってくれる。配送してもらってもよかったが、これくらいなら持てると春日井が言うのでお願いしてしまった。

「他にはいいのか？ 下の階にはアクセサリー売り場があるし、洋服も売ってるが」
「え？ 必要ないけど？」

実羽が首をかしげると春日井は困ったように笑った。
「いや、いいんだ。聞いただけだし」

「そう？ あ、次は家電店に行きたいわ」

「了解。車回してくるから、入り口で待っていてくれ」

そこから二人で、すぐ近くにある家電量販店に行き、電子レンジと炊飯器を購入した。今日一日でどれだけお金を使ったのか考えると、実羽の背筋から冷や汗が出る。

実羽は春日井にマンションまで送ってもらいながら、必要経費だと自分に言い聞かせた。
「春日井さんって、おお……晴樹さんの秘書なのよね？」

「大倉さん」と言いそうになったが、婚約者を苗字で呼ぶのはいかなものだろうと訂正して、名前と呼ぶ。
「もっとも呼んではみたものの、どうもしっくりは来ない。」

「そうだよ。社長は大学時代の先輩なんだ」
「先輩？」

「そっ。俺ずっと柔道やってて、社長がボディガードとして雇ってやるから来いって言ってくれたんだ。すげえ、感謝してる」

「雇ってくれたから？」
「んー、ちよつと違う。俺、警察官、目指してたんだけど、怪我で足痛めたからそっち系は全部駄目になって……。就職なかなか決まらないで、ちよつと腐ってたのを助けてもらったんだ」

春日井の話聞いて、晴樹は親しい人間には優しい人なのかもしれないと、実羽は思った。